

教育大綱の実現に向けて

令和7年3月21日

「教育とは、人々が幸せに生きていくために、個人を向上させ、明日の社会を改善する営み」であると考えています。その営みの目指す人間像として、本市の教育大綱では、「知・徳・体の調和のとれた生きる力」と「互いを尊重する豊かな人間性」を育てることが掲げられています。教育委員会としては、このねらいを実現すべく教育行政に尽力していきたいと思えます。

教育行政は、学校教育と生涯学習(社会教育)という二つの領域に大別されます。本日は、それぞれの理念と当面の重点的な施策について述べさせていただきます。

○ 学校教育（義務教育）

本市のこれからの教育の方向性を述べるにあたり、はじめに、私見ではありますが、義務教育の今後について、展望の一端を述べてみたいと思えます。

国は、ソサエティ5.0に向けた学びの在り方の中で、予測しづらい未来を子どもたちが生き抜くための力として、「基礎的読解力や情報活用能力をベースとした、技術革新や価値創造の源となる飛躍知を発見・想像する力などの、新たな社会をけん引する力」を掲げています。社会に大変革をもたらすと言われている、第4次産業革命の影響は、既に教育にも及んできています。AIを搭載した学習支援ソフトも市場に出回ってきていますし、AR やVR も、早晚、学校教育に導入されていくことでしょう。現在の小中学校においても、GIGAスクールの進展により、学習の効率化や一人一人の理解度に応じた個別学習が整備されつつあります。これがさらに進展していく先では、跳び級が導入されたり、六三制も変化していくかもしれません。今でも、学習塾の中には、授業のほとんどがパソコン相手の自学自習で構成されていたり、学習指導要領の定める学年内容よりも、はるかに高度な学習内容を履修可能にしているところもあります。さらには、次期学習指導要領には、AIの活用が盛り込まれるだろうといった情報もあります。

将来、学校教育における「知・徳・体」のうち、「知」の部分において、創造力や感性、表現力等を養う授業は別として、知識理解の授業については、AIが教える割合が増加し、最終的にその大半を担うことになるのは、さほど遠くない未来のように思われます。

一方、「徳」については、知能の発達イコール人格形成というわけにはいかないもので、学力のような跳び級は適していないと考えます。また、たとえAIの知性が全人類を凌駕するシンギュラリティが起こったとしても、AIが感情や人間性をもって、さまざまな特性や背景を有する子どもたちに寄り添って、人の心を育てられるとは思えません。豊かな

知識と論理的な思考力が理性の構築を促進するにしても、それらのみで人格を完成させるものではないと考えるからです。教職が、AIに代替される職業に分類されていないのは、これによるのではないかと考えています。

このように考えると、学校では、教育のデジタル化が進めば進むほど、それと両輪を成すようにして、子どもたちの心を育てる情操教育が重要性を増していきます。子どもたちは、人・こと・ものとの関係の中で育ちますが、とりわけ人とのかかわりの中で自分と異なる他者を理解し、思いやりや社会性を身につけていきます。よって集団生活を通して道徳的心情を育てることが、未来へ向かう学校教育の大きな役割になっていくと考えられます。

学校は、道徳をはじめ、全ての教育活動の中で、子どもたちの心を育てるように努めていますが、特に子どもたちの心を大きく成長させるのは、学校行事や児童会生徒会活動等の特別活動と部活動においてです。しかしながら、学校では、コロナへの対応に加えて、働き方改革や部活動改革を迫られたために、学校行事等の縮減を余儀なくされました。また、部活動も地域展開によって、学校の純粋な教育活動から徐々に位置づけが変わりつつあります。小中学校の教育を、高校入試から逆算したかのような内容にしてしまうのは、全人的な教育の視点からみるに大きな誤りだと思っています。5年ほど前に、文科省から、家庭でのオンライン授業でも一定の条件下で出席とする旨の通知が発出されました。それに対して、我が西尾市教育の大先達は、こんな川柳を詠まれました。「学校のオンライン化に疑問あり 子に触れもせで何が教育！」一刀両断です。コロナ下での家庭学習や不登校児童生徒に対する配慮としては賛同できますが、オンライン学習のみをもって、義務教育の目標が満たされるとは到底思えません。子どもたちの心を成長させていくためには、実感が不可欠です。このように考えると、生徒集団に葛藤をもたらす応援合戦や合唱コンクール等は、必須行事となります。心を揺さぶるような実体験の中でこそ、子どもたちの心は豊かになっていきます。

ここまで「知」と「徳」を別々に論じてきましたが、人間の道徳的思考は、感性と言語によって進められるため、「知」の支えが必要です。また、同様に豊かな感性や持続力の基盤として健全な「体」があります。すなわち「知・徳・体」のバランスの取れた成長が不可欠であり、そのための学校教育を築いていきたいと思えます。

ここからは、次年度以降の学校教育について、主に特徴的なもの、重点的な取り組みを列挙します。

1 「楽しくて力のつく授業づくり ～ 西尾スタイル ～ 」

子どもたちの学校生活の大半は、授業時間です。授業の中で子どもたちをどのように育てられるかが学校の教育力の要となります。授業で教えなくてはならないのは、教科

書の内容ばかりではありません。子ども集団のモラル形成や人間関係作りなど、集団生活に必要な姿勢も育んでいきます。また、子ども自身の成長を自覚させ、学校に通う価値を伝えていく中心も授業にあります。よって授業改善の営みは、学校教育で最重要視すべき不易の使命と言えます。

授業の方法には、様々ありますが、全ての授業に共通する目標は、「楽しくて力がつく」ことです。授業が楽しくなければ、子どもは、学校が嫌になるかもしれません。力をつけることは、子どもの将来の幸せにつながっています。

子どもたちが、授業で感じる楽しさは、一様ではなく、いくつかあります。「できた」とか、「分かった」は言うまでもなく、一生懸命やれた充実感や夢中で取り組んだ後の疲労感も楽しさになります。適切な学習活動の中で、驚きや感動、達成感など、子どもたちの心を揺さぶることができれば、楽しい授業になっていきます。子どもの心の動かない授業は、学校の雰囲気徐徐に低迷させていくものです。

一見、活動的で楽しそうに見える授業でも、子ども一人一人の表情に目をやると、生き生きと活動している子どもと、中にはそれほどでもない子どももいます。授業内容への興味や理解度による面もありますが、授業(教育活動)を評価する上でのポイントの一つは、まじめでおとなしい子どもが明るい顔をしているかどうかです。そのためには、授業が分かりやすい展開であると同時に、子ども同士が互いを尊重し合うような人間関係性が不可欠です。勉強や運動が得意な子どもも苦手な子どもも、それぞれの発言や行動が、学級内で認められ保障されるルールが必要になります。一例を挙げますと、授業中に友達が発言したら、全員がそちらに顔を向けて聞く、あるいは、意識を向けて聞くことはたいへん重要なことです。どんな友達のどんな発言であっても、一旦はクラス全員で受け止めるという姿勢は、探究学習のための話し合い活動の基礎であるだけでなく、お互いを尊重する健全な人間関係を築き、児童生徒集団のモラル形成の礎となっていきます。毎日の授業でこのルールがきちんと守られていれば、学級は安定し、学級崩壊などは、まず起こらないものです。

授業でつける「力」は、学習指導要領で示されている、各教科領域で目指す能力です。その中には、思考力や判断力、表現力に加えて感性なども含まれています。近年では、とりわけ問題解決力やプログラミング的思考力の重要性がクローズアップされています。

子どもたちの能力には、個々に差があり、学年が上がるにつれて、学力の差は広がってしまう傾向にあります。しかし、今までのオーソドックスな授業では、子どもたちの平均的な能力に合わせた一斉授業が中心でした。そこで理解力に差がある子どもたちみんなに、その力に応じた学習が保障される授業づくりを模索します。いわゆる「個別最適な学び」です。そのためには、授業において、個々の能力に応じた学習プロセスである

「ひとり調べ」を重視したり、タブレットを活用して、習熟度に応じた練習問題に取り組ませていきたいと考えます。

一方、友達と話し合ったり、協力して学習することで得られる能力もあります。仲間とともに問題解決に取り組む「協働的な学び」の中では、自分と異なる意見に触発されて、自分の考えや言動をレベルアップさせていきます。また、コミュニケーション能力や相手意識、組織への理解、さらにはTPOや立場に応じた言動等も身につけていきます。

以上のような考えから教育委員会では、「授業づくりマニュアル」と「学級づくりマニュアル」をまとめ、「西尾スタイル」として市内全校に奨励するとともに、それに則って各学校を指導していくことにします。これらのマニュアルは、教育活動を画一化するものではなく、授業づくりや学級づくりの定石として、児童生徒の学校生活全般を安定化させるもので、教師にとっては授業に創意工夫を凝らすための基盤であり、特色ある学校づくりの支えともなります。そして、子ども同士の話し合いを重視することは、教師主導の授業から、子ども主体の授業へ転換していくことにつながっています。

「西尾スタイル」の普及については、毎年度当初の校長会や教科指導員会等で周知するとともに、市教委の学校訪問や研究発表の事後指導等によって、市内35校の全学級約620クラスの学級担任に加えて、教科担任約130人全てを個別にも指導していきます。

2 未然防止の視点

生徒指導上の諸課題への対応は、「早期発見・早期対応」が定石です。学校が保護者や地域の方とともに、児童生徒を見守る中で、いじめや不登校の兆しとなる子どもの変調にいち早く気づき、関係機関も含めた組織的な対応をすることが定石です。不登校やいじめ等の対策については、学校教育は、既に20年以上にわたり、関係諸機関の協力を拡充しながら取り組んできていますが、SNSの影響や個別の配慮を要する子どもの増加など、要因の複雑化、多様化が進み、現在も予断を許さない状況です。これからも一層の取り組みを継続していかなくてはなりません。

近年、いじめについては、大人が子どもたちの人間関係に積極的に介入することにより、解決に導こうとする風潮が見られます。また、不登校については、学校以外の受け皿を整備していくことで救っていこうとする傾向もあります。一方、学校現場の対応において、特に重視すべきは、未然防止です。不登校やいじめを未然に防止するために、子どもたちが、自己肯定感を高められるような教育活動を展開し、子ども集団の健全なモラルを醸成することです。具体的には、冒頭の義務教育の展望や授業づくりの定石でもふれたように、子どもたちが夢中になって取り組む学校行事や、仲間を大切にしながら進める学習によって、学校での安心感や集団所属感を高めるとともに、主体性や自己肯定感を強め、子どもたちの活力を増大させることです。生徒指導上の諸課題について、

一般的には、起きてからの対処療法を中心に考えがちですが、学校現場ではこのような根治療法の視点から、生徒指導上の諸課題を未然防止できるように、子どもを取り巻く環境全体に手を入れていくことを重視すべきと考えます。今後も、これに立脚した教育活動を推進する学校経営を促していきたいと思えます。

3 GIGA スクール第2次計画

来年度から、GIGA スクールの第2次計画がスタートします。その狙いとしては、情報活用能力の育成はもちろん、働き方改革に資する校務の効率化もありますが、最重要目標は、学習指導要領の目標を達成するために、ICT機器を最大限に活用して、学力を向上させるための指導方法を工夫していくことです。それは「授業の効率化と個別最適化」を行うことにあります。

「授業の効率化」は、主に前述した協働的な学びの中で、子ども同士、あるいは教師と子ども、さらには学級と学校外との情報交流の活性化をもたらすものです。話し合いの際に、友達全員の意見がリアルタイムで分かたり、リモートで他の学校や専門機関と繋がったりできます。一方、「授業の個別最適化」は、児童生徒一人一人の学習の得意不得意に対応して、幅広い学習を準備するものです。授業時間の一部を使って、不得意な子どもに対しては、基礎を確かめるための平易な問題を提供したり、場合によっては、下学年に戻っての学習へも誘導します。また、得意な子どもに対しては、活用力を高める発展的な問題を提供したり、上学年へ進んでの学習も準備します。将来的には、中3を超える内容も取り入れることを検討していきたいと思えます。

来年度は、2年間にわたりICT教育に取り組んだ三和小学校が、「授業の効率化」と「個別最適化」を掲げて研究発表会を開催し、その成果を、市内全小中学校に広めます。三和小学校では、タイピングについても、時間割に位置付けて取り組んでいきます。今後は、ICT教育の発展的な活動として、校内タイピング選手権とか、中学校では、児童生徒が自作したプログラムによるゲーム大会や、文化祭での自作ゲームの発表などの工夫も考えられます。

情報化社会の進展の中で、学校教育においても情報教育が重視されています。とりわけ情報モラルとメディアリテラシーは、その要となります。情報モラルについては、生徒指導上の大きな課題でもあり、本市では、令和4年度に自作した「GIGA ワークブックにしろ」を教材として、全学年で指導を継続しています。

一方、教育におけるメディアリテラシーとは、「児童生徒が、一つの出来事について、新聞、本、テレビ、SNSなど、さまざまな情報を調べ、それらを比較したり評価することを通して、自分なりの意見を構築し、表現する態度を身につけさせること」です。この点から、改築予定の吉良中学校の図書室は、学習・情報センターとして効果的に活用できるも

ので、先進的な実践も期待されます。

玉石混交の情報が氾濫するSNS上では、アクセス数を稼ぐための投稿も多く、信憑性や常識は軽視して、より刺激的な、面白い記事に関心が集まる傾向が顕著です。さらには、ネット上で多くの関心が集まったものが正論と勘違いされ、それが世論の形成に影響する風潮さえあります。歴史的に見ても、ほとんどフィクションである「仮名手本忠臣蔵」が、いつのまにか史実のように広まってしまった事実を振り返れば明白です。令和9年に本市が発刊する予定の西尾市史別冊「元禄赤穂事件資料(仮称)」は、郷土愛やプライドのみにとどまらず、メディアリテラシー教育としても大きな価値をもった教材にもなりますので、それを十分に活用できるように指導案等も準備して広く授業実践を奨励し、氾濫する情報に翻弄されない姿勢を生徒たちに育てていきたいと思えます。

以上のような現状に鑑み、来年度より、ICTスーパーバイザーを設置します。それによって、ICT教育全般の調査研究と今後の方向性について示唆が受けられるとともに、それに対応する施策をリードする役割を担ってもらう予定です。

4 チーム担任制導入に向けて

学校現場では、ベテラン教員の大量退職に伴い、経験の少ない若手教員が増加しています。それに加えて、本市では、尾張部出身の新規採用教員も毎年一定数おり、彼らの多くは、本市での3年間の勤務を終えると、出身地域に転出していく傾向があります。そして、その欠員分は新任教員で補充されています。新任教員は、澁刺と活動的で、ICTや英語等については有能な者が多いものの、授業づくりや生徒指導、保護者対応についての経験値の乏しさには、やむを得ない面もあります。そこで、難しい指導場面を組織として支え、授業や学級経営を安定化させ、学校の信頼感を維持向上するために、チーム担任制や複数担任制の導入を検討していきます。これによって、増加傾向にある特別な配慮を要する児童生徒や多様な価値観の保護者へ適切に対応できるとともに、先輩教師の指導を間近で習うことにより、若手教員の教科指導力や学級経営力も向上し、安心な学校を継続できる指導力の育成につなげていきます。さらには、校内の人間関係を緊密にして、学校現場のOJTを活性化させるねらいもあります。一方、課題としては、学校には担任以外の余剰人員が少ないため、学校規模に適した導入方法を検討する必要があります。また、指導力の高いベテラン教員の負担が、一時的に増えることになるかもしれませんが、中長期的に見れば、若手教員の教師力が充実することは、教員全体の負担軽減につながっていくものとなります。今後、校長会とも協議を重ねながら、令和8年度の導入に向けて進めていきたいと考えています。

○ 生涯学習

人生100年時代とさえ言われるようになり、市民の皆さんが豊かで明るい生活を送る上で、生涯学習の重要性は、一層高まりつつあります。生涯学習には二つの側面があります。一つは、スポーツや文化、芸能等に親しむことに代表されるように、日常生活を豊かにし、心や体の健全維持に資する活動で、これはその成果が主に個人の幸福感に帰するものです。もう一つは、ボランティア活動や、情報モラルに関するノウハウ、家庭教育・親学など、自己を高めることによって社会貢献や子どもたちの健全育成につながる活動で、これはいわば社会教育と言えるもので、その成果が公共にも寄与するものです。

生涯学習の中で、一つ目の「個人の日常生活を豊かにする活動」については、徐々に充実していく方向にあると捉えています。今後も市民ニーズを探りながら、生涯学習講座等をブラッシュアップしていきたいと思っております。

一方、二つ目の「自己を高め、公共に寄与する活動」は、社会情勢の変化に追いついておらず、行政的には、やや置いてけ堀になっている感もあり、昨今その必要性は高まってきていると捉えています。例えば、ボランティア活動などは、近年参加が増えてきているように思いますが、一方、社会道德の基盤となっていく自己啓発や、家庭や地域の教育力は、停滞傾向にあると思っております。そのために、社会全体の疎外感や格差意識の浸潤、またSNSを介した犯罪をはじめ、虐待やネグレクト、児童生徒に関わる問題行動等、さまざまな問題の深刻化に歯止めをかけることができないでいると思っております。大人全体が改めて襟を正す時なのかもしれません。先日、市役所の駐車場内を行ったり来たりしている軽自動車を見かけました。あいにくの混雑で駐車スペースは空いていませんでした。身障者用のスペースだけはずっと空いていましたが、件の軽自動車はその前を何度も通り過ぎていきます。これは一例にすぎませんが、本市の未来を担う子どもたちのためにも、私たち大人の皆が、こういう心持ちでありたいものです。

生涯学習の推進にあたっては、市民の皆さんの生きがいや人生の意義、個々の尊厳など、将来にわたる持続的な幸福である「ウェルビーイング」を求め続け、西尾市民「ひとりひとりが輝く共生社会の実現」を目指してまいります。

以上のような認識を共有しながら、全ての市民が、個人で、あるいは他者とともに学びあい、自己向上をもたらす学びを通して、人と人がつながっていくこと。そしてその中で、生きる意欲や喜びを実感できる「新たな自分」をアップデートし続けることが重要となります。またその営みは、市民相互の信頼関係や相互支援の絆を強め、地域づくりを推進することになり、理想的な共生社会の形成に寄与すると考えています。教育委員会では、先年、第二期西尾市生涯学習推進計画「みんなの学びチャレンジプラン」を策定いたしました。今後は、その基本理念である「学ぶ つながる 新しい自分 ～ひとりひと

りが輝く共生社会を目指して～」に基づいて生涯学習の推進に取り組んでいきたいと思
います。

それでは、今後の取り組みやその方向性について述べます。

1 家庭教育の推進

経済優先の現代社会では、大量消費を支えるために、偏った情報が流されている傾向
は否めないと思っています。例えば、CMなどは、商品の付加価値を高め、消費活動を促
進するために、新しいものが全て優れているかのように思わせている節があります。こ
の計略は、教育にも影を落としており、保護者の不安をあおって消費に結びつける教育
関連産業すらあるようです。

家庭教育は、子ども基本法にも示されているように、教育の基盤を成すものですが、
昨今は、核家族世帯、一人親世帯等の増加により、家庭教育力の低下を指摘する声があ
ります。また、格差社会の進行とともに、虐待やネグレクト、親子間で起きた犯罪など、家
庭教育の在り方も心配されています。そこで、家庭教育力低下の現状とその課題を洗い
出し、教育施策に反映させていくための組織を新設したいと考えます。例えば、社会教育
審議会の専門部会という位置づけで、家庭教育推進のためのプロジェクトチームを設け
ることも一案としてあります。保護者を支えるために、教育委員会はもとより、市役所関
係部局、校長会、市P連や町内会等の地縁組織と連携していきます。そして、地域ぐるみ
で家庭教育を支援する共同参画型活動を推進していく機運を高めていきたいと思いま
す。

とりわけ推進していきたいのが、SNS等の弊害から子どもたちを守る活動です。スマ
ホの普及は、いじめや不登校は言うまでもなく、睡眠不足や学力不振など、児童生徒の
成長に大きな悪影響を及ぼしています。また、乳幼児期においては、電子機器が脳の発
達に及ぼす影響を懸念する声があります。学校では、部活動の縮減傾向により、家庭で
の時間が増えたこともあり、その悪影響は拡大しつつあります。一方、生徒会が中心とな
って自主的に、家庭でのスマホの使用制限ルールを作っている中学校もあります。また、
以前、市P連でも呼びかけを行ったことがありましたが、今は、意識が薄れてきてしまっ
ているようです。そこで、教育に関わる大人全体で、スマホや電子機器の利害について
正しく認識し、その上で子どもたちへの指導を展開する必要があります。本年度、学校教
育課主催の問題行動等対策協議会においても検討課題としました。また、西尾市教育研
究会の養護教諭部会においても、令和8年の西三河地区での研究発表に向けて、電子機
器と健康について調査研究を始めており、校長会や市P連、関係部局を巻き込んだ啓発
活動を模索しています。

2 生涯学習事業の充実

まずは、生涯学習の基盤となる、ふれあいセンター等における講座の充実です。市民のニーズやライフスタイルに応じた講座を展開し、受講者の学ぶ意欲・学ぶ楽しさを充実させてまいります。ブラッシュアップの一つの方向性として、リカレント教育をはじめ、ジェンダーや家庭の在り方に関する講座の開設も検討していきたいと思っております。リカレント教育とは、「社会変化への対応や自己実現を図るための社会人の学び直し」を指します。セカンドキャリアのための資格取得にとどまらず、さまざまな専門知識や社会貢献活動に出会い、新たな生きがいを見つけることは、人生100年時代には、とりわけ重要になってくるものと思われまます。地域企業やNPO法人等と連携した講座を実施することで、小学生、中学生・高校生のキャリア教育だけでなく、成人のリカレント教育の視点を導入していきたいと思っております。さらには、共生社会の観点から障害者や外国にルーツを持つ方も、参加しやすい配慮や工夫を取り入れてまいります。

また、小中学生を対象に展開している「寺子屋にしお(放課後子供教室)」や「にしおチャレンジみらい塾(旧サタデープラン教室)」の拡充や精選により、放課後等における地域と学校が連携・協働した活動を広げ、学校教育だけでなく社会教育の視点からも子どもの広い学びを支えていきます。そして、子どもの学びを支える地域の皆さんが、その活動にやりがいを感じ、自分自身の学びにしていただけることにも期待したいと思っております。

3 文化財や図書館を幸福感につなげる

壮大な旅行記を読んだり、世界各地を訪ね歩くようなテレビ番組を観ていると、質素な暮らしぶりにもかかわらず、ゆったりと幸せに生きている人たちの姿をしばしば目にします。そして物質的に豊かであることと、幸せな暮らしが必ずしもイコールでないことに思い当たります。現代社会において、「清貧」という言葉は、失われつつありますが、人々の恒常的な幸福感やアイデンティティは、自尊心や誇りを醸成する伝統や郷土愛によってもたらされるものではないかと思っております。

本市は、縄文から近代に至るまで、歴史的遺産も豊富であり、文化の薫り高い誇らしい土地柄です。三河最大級の正法寺古墳をはじめ、平城京で出土した木簡からは、佐久島からの献上品が窺えます。室町時代には将軍家一門として高い家柄を誇った吉良氏、江戸時代の西尾藩主は、老中も務めました。日本の近代化を支えた実業家や文化人もいます。そして、私たちにとっては身近な、お茶や鰻も、先人たちの努力や苦難の末に、現在の名産品となったものです。また、岩瀬文庫は、言うまでもなく本市が全国に誇る古書の博物館です。岩瀬文庫、おもちゃ館、図書館一帯については、エリア全体を、文化の薫りがする憩いの場となるように、統一感のある整備を進めたいと考えます。

図書館については、施設面での大きな改修は、当面難しいものの、DX化の推進により、市民の利便性の向上を目指します。また、西尾信用金庫のご厚意による読書通帳を活用して、子どもたちの読書習慣を啓発することや、ソロプチミストの皆さんのご寄付によって、年々充実してきた絵本コーナーの利用促進を継続します。さらには、おもちゃ館を活用した読み聞かせの会をはじめ、ブックスタートを拡充する方向も模索していきたいと思います。

今後も、本市の歴史的遺産や図書館を活用して、市民の郷土愛や誇り、生活の潤いを醸成し、幸福感につなげていくことを目指します。

4 生涯学習センター貸室の活用

生涯学習センターについては、その構造や主な機能について、議会の場でも幾度か説明をさせていただきましたので、ここでは、その運用面での計画についてふれます。一部の貸室では、ネット環境を整え、パーテーションにより、3つの区画に仕切られるようになっています。各区画には、リモートによる研修会やウェブ会議での利用も見込んで、大型モニターも整備する予定です。これにより利用者の皆さんが、専門機関と繋がる講座や市外他地区との情報交換会や交流会等をリモート開催することが可能となります。

また、学校教育では、ICTスーパーバイザーの指導の下、この機能を活用して、リモートによる授業研究会を計画します。学校のタブレットから送られた授業や研究協議会、行事などの映像を、リアルタイムで見ながら研修することが可能です。とりわけ参加人数が多すぎて教室に入れなかったり、遠隔地のために授業参観が難しいケースにおいては功を奏します。また、将来的には優れた授業や指導案をアーカイブ化して、各学校の現職教育やOJTに資するように整備し、教育センターとして運用していきたいと考えています。

以上、来年度以降の教育行政の方向性や教育施策について、特徴的なものについて述べさせていただきました。近年、メディアなどでは学校教育の問題がしばしばクローズアップされますが、子どもたちは大人の背中を見て育っています。学校教育も本市の社会規範を支えに成立しており、全ての人が輝く共生社会を構築するにあたっては、大人も学び成長していける仕組みが必要です。さらには、経済優先の格差社会に、教育が浸潤されないように努めながら、西尾市と子どもたちの未来のために、今後の教育施策を全力で推進していきたいと思います。

結びといたしまして、教育委員会としては、教育大綱の実現に向けて、以上のような理念をもって、不易と流行を見極めながら、教育行政に邁進してまいりますので、市民の皆様、議員各位のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。